

梅花流たより

平成二十七年年度梅花流全国奉詠大会が「パシフィコ横浜国立大ホール」にて開催されました。本年は大本山總持寺峨山韶碩禪師六百五十回大遠忌の正當の年となり、大本山總持寺さまの御膝元、横浜の地で奉詠奉詠として峨山禪師のご遺徳を讃えることとなるご縁を結ばましたこと、これは私達講員にとって眞理に尽きることと思ひます。オーブニングでは總持寺保育園、鶴見大短期大学付属三松幼稚園のかわい園児たちや愛嬌たっぷり中国獅子舞が出迎えてくれました。

式典が終わるといよいよ登壇奉詠です。群馬県は七十名で鳥取県との合同登壇第一番となりました。雲林寺講は参加者全員壇上にて観世音菩薩御和讃を落着いてお唱えすることができました。

また、大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師六百五十回大遠忌奉詠では總持寺祖院の地元、石川県能登の伝統芸能である「御陣乗太鼓」の演奏と舞、峨山禪師と大悲真読の逸話に基づいた演出に「サンドアートパフォーマンス」を融合したのを目の当たりにして、私達は幻想の世界へと引き込まれて行くようでした。

そして大本山總持寺貴首、江川辰三禪師の詠題によるお唱えにより会場全体が一体となつて峨山禪師のご遺徳を讃えられたと確信いたしました。

轟 美代子



雲林寺、常林寺、無量院講合同で記念撮影しました

正流詠範合格おめでとうございます
和讃会会長 篠原禮子

雲林寺梅花流の指導にあたる轟先生が、昨年十二月、正流詠範の試験に見事合格されました。雲林寺和讃会代表として心よりお祝い申し上げます。

正流詠範とは、寺庭婦人（お寺の奥さん）で梅花流を指導される立場の方の資格では最高位のもので、検定内容も難しいものと聞いております。

轟先生のさらなるご活躍と私共の雲林寺講のますますの発展を祈念してご挨拶申し上げます。

雲林寺報

第拾九号



平成27年4月3日 大般若会 ～般若(はんじゃ)の風を受ける～

お盆の御供えをしましょう
(水の子)

水の子は、なすやきゅうりなどをさいの目に切り洗ったお米を混ぜて、器にもりつけたもとの蓋に、いきわたるようという思いがこめられています。

(きゅうりの馬、ナスの牛)

きゅうりやなすに、割り箸をさして作ります。どちらも、**亡くなった方の霊のための乗り物**です。きゅうりの馬は、馬に乗って、早く帰ってきてください。なすの牛は、牛に乗って、景色を見ながらゆっくりお帰りにください。という意味があります。



ギラギラと照りつける太陽、流れる汗。八月は暦の上では秋ですが、一年の中で最も暑さ厳しい時期です。日中の暑さにうんざりし、少しでも涼しさを求めようと思いますが、逃れようとすればするほど不思議と暑さも増していくようです。

安禅は必ずしも山水を須(もち)いず 心頭を滅却すれば火も自ら涼し

坐禅は必ずしも整った環境でしかできないわけではありませぬ。あれこれと考える事を一旦手放して、ただの自分になりきれば、そこは心安らぐ場所になるかもしれませぬ。

「暑い暑い」と口にするのをやめて
「夏は暑い」とありのままに受けとめるところに暑さを乗り越える秘訣があるのかもしれない。とはいえ、あまり無理をし過ぎて熱中症などになつては大変です。

何事もほどほどが一番。身体を大事にしながらこの夏を楽しみたいものです。

住職 轟 紀久

大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌 大本山總持寺報恩参拝と伊豆の旅

日程 平成27年10月29日(木)～30日(金)
参加費 34,000円
(供養恩金、参拝献香料¥3000円、交通費、朝食1回、昼食2回、夕食1回、記念写真代等含みます) 詳細は雲林寺にお問い合わせください。

本年の旅は大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌の正當法縁にあたり、横浜鶴見の大本山總持寺を参拝し、ご先祖さまの供養法要、諸堂を参拝致します。他、北条政子建立の伊豆最古の木造建築「指月殿」や伊豆の小京都と呼ばれる、伊豆最古の温泉場修善寺へ立ち寄り、弘法大師空海開山の「修禪寺」(曹洞宗)を参拝し古都の風情に浸る内容でございます。皆様のご参加をお待ち申し上げます。



ホテル天坊

護持会だより

第三回通常総会が開催されました。
六月二十九日(月)草津温泉ホテル櫻井に於いて、総代世話人総数四十二名中出席者二十五名、委任状提出者十七名によって総会が開催されました。詳細は同封の「第三回通常総会開催結果のお知らせ」及び資料をご覧ください。
※北軽井沢の世話人、恩田明さんから神戸久利さんに変更になりました。



第7回雲林寺親睦ゴルフコンペ

開催日:平成27年10月12日(月・祝)
場所:草津カントリークラブ
募集人員:60名
※詳細は雲林寺にお問い合わせ下さい。過去参加者にはハガキにて通知いたします。多数のご参加お待ちしております。

除夜の鐘

平成27年12月31日 23:45～
雲林寺鐘楼堂

除夜の鐘をつく理由は、人の心にある煩惱を祓うためとされています。仏教では、人には百八つの煩惱(=ぼんのう)があると考えられてきました。その煩惱を祓うためにつく除夜の鐘の回数は108回とされています。

編集後記

八月も「いのちの集い」であるお盆が終わりますと、吾妻の地は、秋めいてまいります。そして、九月は、秋彼岸でありませぬが、「暑さ寒さも彼岸まで」というように春の彼岸の頃になると寒さも漸(ようや)く薄れ、暖かくなり、また秋の彼岸になると残暑もなくなり、涼しくなります。つまり一年のうちで大変いい気候であるので、仏道の修行にふさわしい期間として、彼岸の一週間を特に励むようになったのです。

また、春分秋分の日、昼と夜の長さが等しく、中道を尊ぶ仏教にもかたないです。中道とは、かんたんと言うと、何事も極端に考えないということですが、これは有る、これは無いということに片寄らず、執着しないことです。苦しいことや、楽しいことがあっても、できるだけそれにとらわれないように心をたもつ、それが中道の精神です。難題ですね。

副住職 轟 省吾

次号は平成二十八年一月になります。